


前回私たちは、ステパノの殉教の死とそれを機に始まった教会に対する迫害のゆえに、使徒たちを除いた弟子たちが、諸地方に散らされたことを見ました。そのメッセージの中で、ステパノの死と迫害については、それが「災い」であること、でも主は、そのようなことさえも用いて、ご自分の救いの計画を成就されることを確認したのです。今日の箇所でも、その主の救いの計画が、実現へと向かっているのを見ることができます。

4-5 節「他方、散らされた人たちは、みことばを宣べながら、巡り歩いた。5 ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べ伝えた」。迫害を逃れるために、エルサレムを離れた弟子たちは、みことばを宣べながら、巡り歩きました。そして、その中に、エルサレム教会の毎日の配給の奉仕者として、ステパノと共に選ばれたピリポもいて、彼はサマリヤの町に下って行くことで、そこの人々に主イエスのことを宣べ伝えるのです。この8章は、ピリポを通して行われた主の救いのわざについて記されています。

 地図を見て下さい。皆さんは「サマリヤ」と聞いて何をイメージされます？私は「サマリヤの女」（ヨハ4章）の話を中心に考えました。「良きサマリヤ人」の話の思い出す方もおられると思います。「サマリヤの女」の話の中では、ユダヤ人とサマリヤ人とが付き合いをしないことが記されていますが、なぜそうだったのでしょうか？サマリヤとは、元の北イスラエルのことですが、彼らは紀元前722年頃にアッシリヤに滅ぼされてしまいます。そこに外国人たちが入ってきて、彼らとの混血が進むのです。それがサマリヤ人です。ここでは当然、異邦の神々の影響も受けるので、ユダヤ人たちは、彼らのことを軽蔑するようになりました。

6-8 節「群衆はピリポの話聞き、その行っていたしるしを見て、みなそろって、彼の語ることに耳を傾けた。7 汚れた霊につかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫んで出て行くし、多くの中風の者や足のなえた者は直ったからである。8 それでその町に大きな喜びが起こった」。

サマリヤに下り、そこで福音を宣べ伝えていたピリポですが、人々は彼の話のしるし（わざ）を身をもって体験したからです。主のわざとは、これまでも見てきたように、汚れた霊の追い出しや病を直すことでした。そのように多くの人たちから悪霊が出て行き、病人たちが癒されることで、その町に大きな喜びが起こるのです。そして人々は、信じてバプテスマを受けるにまで至ります。12 節「しかし、ピリポが神の国とイエス・キリストの御名について宣べるのを信じた彼らは、男も女もバプテスマを受けた」。

ここで注意したいこと、それは人々が信じたのは、神の国とイエス・キリストの御名についてであって、奇蹟やそれを行っていたピリポを信じたのではないということです。この点を間違っははいけません。確かに、人々の心は、ピリポが行っていたわざを通して開かれます。でも、彼らが信じたのは、ピリポではなく、彼の宣べ伝えていた神の国とそれを与えるために来られた救い主イエスだったのです。なぜこういうことを言うのかというと、このサマリヤの町には、間違った動機で信じてバプテスマを受けた人、つまり、信仰の対象が救い主である主イエスではなかった人がいたからです。

9-11 節「ところが、この町にシモンという人がいた。彼は以前からこの町で魔術を行って、サマリヤの人々を驚かし、自分は偉大な者だと話していた。10 小さな者から大きな者に至るまで、あらゆる人々が彼に関心を抱き、『この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だ』と言っていた。11 人々が彼に関心を抱いたのは、長い間、その魔術に驚かされていたからである」。

この魔術師シモンは、魔術をもって人々を驚かすことで、自分こそ偉大な者だと話していました。そして、人々もまた「この人こそ、大能と呼ばれる、神の力」だと言っていたのです。彼がどれほどの魔術を行ったかはわかりません。でも、「小さな者から大きな者に至るまで、あらゆる人々が彼に関心を抱き」とありますから、多くの人が彼のことを信じていたことでしょう。なかには、汚れた霊や病に苦しむ人、またその家族の人などもいたと思いますが、そんな人々のことを、果たしてシモンが心にかけていると思いますか？むしろ、そのような人々こそ、彼が偽の診療や呪術をもって虜にしていた人々だったのではないのでしょうか？なぜなら、彼の関心事は、彼自身が人々から神のようにあがめられ、偉大な者となることだったからです。

そこにピリポが現れて、ことばとわざによってキリストを証し、人々のうちに真の解放をもたらしたわけですから、その町に大きな喜びが起こるのも当然です。では、シモンにとって、そのことはどうだったのでしょうか？人々の関心がいきなりピリポへと、また彼の宣べ伝えていた主イエス・キリストへと移っていったわけですから、もしあなたがシモンなら、どんな気持ちになると思いますか？彼にどれだけの力があつたかはわかりません。でも、ステパノを嫉み、彼を殺したユダヤ人たちのように、シモンもまたピリポに対する嫉みに燃え、彼を殺すことで、以前のように彼の栄光を力づくで取り戻そうとしてもおかしくなかったと思うのです。

ところが、13節「シモン自身も信じて、バプテスマを受け、いつもピリポについていた。そして、しるしとすばらしい奇蹟が行われるのを見て、驚いていた」。驚くことに、シモンは、ピリポに敵対するどころか、彼もまた信じて、バプテスマを受けるのです。そして、ピリポの弟子のように、いつも彼について行くことで、ピリポを通して行われていたすばらしい奇蹟に驚いていました。もしこの話がここで終わっていたなら、「シモンも救われて良かった」となっていたことでしょう。でも、問題はその後、起こります。

14-17節「さて、エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が神のことばを受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネを彼らのところへ遣わした。15 ふたりは下って行って、人々が聖霊を受けるように祈った。16 彼らは主イエスの御名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊がまだだれにも下っておられなかったからである。17 ふたりが彼らの上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた」。

ペンテコステの日に、聖霊が弟子たちに降ることで彼らは力を受け、エルサレムにおいて大胆にキリストを証したことを私たちは見てきたわけですが、この時、ピリポを通して信じ、バプテスマを受けたサマリヤ人たちは、聖霊をまだ受けていませんでした。その理由としては、おそらくこれが教会の初期の頃で、後に異邦人たちに初めて聖霊が与えられる時と同様に、この時もサマリヤ人たちに聖霊が与えられることを使徒たちによって公認される必要があつたと考えることができます。ですから、二章でペテロが語った「悔い改めて、主の名によってバプテスマを受ける者には、賜物として聖霊が与えられる」という理解で問題ないと思います。

ただこの時に先ほど言いました「ある問題」が起こるのです。18-19節「使徒たちが手を置くと御霊が与えられるのを見たシモンは、使徒たちのところに金を持って来て、19 『私が手を置いた者がだれでも聖霊を受けられるように、この権威を私にも下さい』と言った」。他のサマリヤ人たちのように、この時、シモンも聖霊を受けたかはわかりません。この後の彼に対するペテロの言葉からすると、おそらく彼は受けていなかったことでしょう。だからこそ、聖霊による権威を自分も持ちたい、しかも、それをお金で買おうと思うのです。

そんな彼に対して、ペテロは言います。20-23節「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。21 あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません。あなたの心が神の前に正しくないからです。22 だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。23 あなたはまだ苦い胆汁と不義のきずなの中にいることが、私にはよくわかっています。」

聖霊が人々に降るのをどのようにして見るのができたのか、そのあたりは説明がないのでわかりません。おそらく、使徒たちが最初、聖霊を受けた時と同じように、炎のような舌が彼らの上にとどまり、彼らが他国のことばで神のことばを語るのを聞いたのでしょう。というのも、十章で異邦人にも聖霊の賜物が注がれた時、彼らは異言を話し、神様を賛美しているからです（10:45-46）。

ではどうでしょうか？それを見たシモンは、自分もその権威がほしいと願ったわけですが、聖霊を受けること、また自分を通して他の人にも聖霊が与えられるのを願うことは、悪いことですか？むしろ、それは良いことではないですか？私たちはみな聖霊に満たされ、聖霊に導かれて歩むことを願うべきではないでしょうか？私たちをして聖霊を受けることは、神からの力を受けることであり、キリストの証人となることだからです。

では、シモンのどこに問題があつたのか？それは、彼が聖霊を求めた動機です。なぜその権威をほしがつたのかということです。皆さん、シモンは、なぜ聖霊による権威を求めたのでしょうか？それは神様に栄光を帰する

ためですか？いいえ。その権威（力）によって、彼自身が再び偉大な者となるためだったのです。以前のように、その権威をもつことで、人々を驚かせ、彼自身が神のようになろうとしました。だから、普通なら考えられないことですが、彼は聖霊による権威を、お金で買おうとしたのです。

いかがでしょうか？こんな彼が、主イエスの十字架と復活を本当の意味で理解していたと思いますか？「主イエスが十字架にかかって死なれたのは、この私のためだ」と、自分の罪を嘆き、その自分のために身代わりの死を遂げて下さった主イエスを、救い主、主として心から信じていたと思いますか？彼は確かに神の力を信じていたことでしょう。だからこそ、ペテロが悔い改めを迫った時、彼はこう言いました。24 節「あなたがたの言われた事が何も私に起こらないように、私のために主に祈ってください」。

もしシモンが、神様の力を信じていなければ、つまり、さばきを恐れていなければ、このようには願わなかったと思います。では、彼もまた聖霊を受けていたのでしょうか？もっと言うと、彼は聖霊に満たされていたのでしょうか？聖霊に満たされながら、同時に、「悪事」と言われるようなことを神様の前に考えることはできますか？私は、私たちのうちに悔い改めなければならないことが一つでもあったら、その人は聖霊を受けていないと言っているではありません。主イエスを信じて、彼につくバプテスマを受けたのなら、賜物として神様は聖霊を与えて下さっていると信じます。

けれども、聖霊が与えられたということで終わってはいけません。聖霊に満たされること、つまり、満たされ続けることを求めなくては、私たちはすぐに自分勝手な考えや自己中心な罪の生き方へと戻ってしまうからです。聖霊を通して神様のことを考えているか、自分自身のことを考えているか、そのどちらかしかないのです。シモンは、信じる前も、信じた後も彼自身のことを考えていました。主の恵みによって罪赦され、永遠のいのちをもつ者とされたことを喜ぶのではなく、いかにして自分がその偉大な力を得、神のようになるかを彼は考えていたのです。それゆえに、そんな彼が聖霊に満たされることはありませんでした。

いかがでしょうか？今日あなたは聖霊に満たされて、主の御心を行うことを祈り求めておられますか？あなたの心は、そのように神様の前に正しいですか？聖霊に満たされる時、聖霊が私たちのうちでキリストを証して下さいます。そして、主の栄光を、つまり、主がいかにすばらしいお方であるかをわからせて下さるのです。そうすると、このシモンのように、お金の力で神の権威を買おうなど考えもしなくなります。また何よりも、主イエスとお会いすること、つまり、主の再臨を待ち望むようになるのです。

25 節「このようにして、使徒たちはおごそかにあかしをし、また主のことばを語って後、エルサレムへの帰途につき、サマリヤ人の多くの村でも福音を宣べ伝えた」。かつて自分の身を守るために、主を裏切ったペテロも、かつてサマリヤの人々が主を受け入れなかった時に「天からの火をもって彼らを焼き尽くしましょうか」と言ったヨハネも、聖霊を受け、聖霊に満たされることで、ユダヤ人たちだけでなく、それまで隔てのあったサマリヤ人やその後には異邦人たちにも福音を語る者となりました。神様が、彼らのうちに聖霊を通して主イエスの救いのご計画とそのすばらしさをわからせて下さったからです。聖霊に満たされるか、自己中心になるか、どちらかしかありません。そして、聖霊に満たされるなら、あなたは主のすばらしさを知り、主を証する者となるのです。